

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520777

研究課題名(和文)近世後期における環伊勢湾経済圏の産業及び流通からみた地域市場圏の再構築

研究課題名(英文)Trading area Ise-wan judging from the industry and circulation in early modern period

研究代表者

曲田 浩和 (MAGARIDA, Hirokazu)

日本福祉大学・経済学部・教授

研究者番号：00329765

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：近世後期の環伊勢湾の産業の展開を考えるにあたり、まず地域性を重視した。知多半島のフィールドとした場合、西浦と東浦地域の差異を考えた。つまり、伊勢に近いか、三河に近いかである。次に、市場としての地域の持つ性格を明らかにした。とくに産業を生み出す生産力との関係において、酒・木綿・干鰯の流通を取り上げた。

なかでも、半田の酒造業の展開を考えるにあたり、半田の地域を包摂する求心力や、消費地刈谷への供給の意味を重視した。そのうえで江戸をターゲットとする名産品を生み出すことができる。生産および販売のための流通を区別して明らかにすることが必要である。

研究成果の概要(英文)：I emphasized locality when ring Ise-wan economic bloc. The products in this area were circulated at Edo market. Lequor and cotton were shipped much in the local specialties. Economical character of the east coast and the westcoast is different in Chita-hanto in Ise-wan. Industry is popular for Handa located in east coast. Therefore Handa used the financial power of the circumference are developed a brew trade. Transportation capacity is an expensive area and ring Ise-wan economic bloc can carry many specialties by ship.

研究分野：日本近世史

キーワード：酒造業 木綿業 干鰯流通 廻船 生産 消費

1. 研究開始当初の背景

研究計画では、醸造業と繊維産業を予定したが、結果としては知多郡の醸造業を対象とした。関わる地域としては環伊勢湾である。環伊勢湾とは伊勢湾・三河湾を範囲とした地域を想定する。

知多郡の江戸積み酒造業の展開は、以下のように考えられる。

天明期以降、江戸積み酒の量が飛躍的に増加した。その背景には、18世紀後半の江戸での酒消費量が增大したことがある。江戸の下り酒の多くが灘・伊丹などの上方酒であり、江戸での上方酒は関東地廻り酒に比べ美味しい酒という評判であった。

知多郡の酒造業は上方に比べ、江戸の近い海運上の利便性を活かし、拡大する江戸酒市場に酒を供給した。質・量ともに上方酒の江戸市場での優位性は変わらなかったが、知多酒を中心とする尾張酒の江戸下り酒の占有率は10%を超えた。

しかし、文化期に江戸入津の酒が供給過多に陥ったことにより酒価格が暴落した。上方酒より知多酒は味が劣ることから、その影響を受け知多郡では酒造業を廃業する者も現れ、知多酒造業は衰退した。

天保期以降、知多郡では上方に近い味わいの持つ酒づくりに成功し、上方の酒銘柄を知多酒の菰印に使用するなどの商法で、知多酒の江戸市場への移出を伸ばしていった。幕末期には江戸の下り酒のなかでの尾張酒の占有率は16%を超えた。

一方、西三河の酒造業は、文化期に江戸の酒価格暴落の影響を受けたことは、知多郡と同様であるが、天保期以降再浮上した知多郡と比べ、西三河は衰退の一途をたどる。そのため、江戸向け醸造樽積み船である奥立廻船の本拠は、西三河から知多郡に移った。

2. 研究の目的

環伊勢湾は江戸向けの特産品を販売することにより、産業を育成していった。大量に販売するためにさまざまな工夫がなされている。そのことを環伊勢湾の特徴を考え、地域の産業構造の変化の視点を取り入れることにより、おもに知多郡の醸造業を中心とする地域経済を明らかしようとした。18世紀の知多郡の酒造業の展開と、19世紀(天保期)以降の知多郡の醸造業の展開について考えることにした。

江戸向けの特産品を大量かつ恒常的に送り出すための生産体制を作り出すには、以下の3点が不可欠である。

原料調達

製品輸送

地域の求心性

とくに、は地域経済を活性化するための村民たちの結びつきや地域を越えた支え合いが大切である。豪農(商)と働き手や隣接村の対立などの社会矛盾もあるが、一方では雇用を生み出す産業のあり方も考えなくてはならない。これまで前者に重きを置かれていた歴史学ではなく、後者も取り入れつつ、村の諸関係を明らかにする必要がある。

3. 研究の方法

村の再編を考える一つとして、商品経済の発展を取り上げた。これまでの産業史研究は、醸造家の経営史料を分析する方法が一般的である。本研究では3段階の地域関係に注目した。

村

村周辺

環伊勢湾の経済力

この3段階のつながりによって、特産品を生み出す地域が形成されると考えた。19世紀以降、プレ工業化が全国的に浸透するなかで、知多地域が特殊なわけではなく、特産物化を進める地域で考えることができ

る研究方法である。

さらに、産業史の方法論に生産・流通のみならず、消費の問題を取り入れた。商品経済の発展には製品の質向上は不可欠なことであった。

4. 研究成果

まず、18世紀の知多酒造業の展開については、知多郡西浦地域の小鈴谷村を対象に、荒廃農村の再建の視点から考えた研究である。享保飢饉の影響により、人口が激減した。その原因の一つは流行病であったが、働き手が少なくなったことで、土砂災害により赤土に覆われた田畑を回復させることができず、出稼ぎに行かざる終えない状況を生み出したことである。

この状況を立て直したのが酒造業の展開であった。村の酒造家を増やすことで、雇用を生みだし、村の人口を回復させた。酒の生産量を増やすために必要なことは原料米の確保であった。この米を他領である桑名から求めた。桑名米が酒造に適した米であったことも、酒造業を展開するうえで、好条件だったといえる。

次に、知多郡東浦地域の半田村を対象に、半田村周辺地域との関係に注目した。18世紀前半期には半田村周辺の阿久比地域は酒造業がさかんに行われていたが、18世紀後半には、阿久比地域からの酒造家はなくなり、半田村・亀崎村に集中するようになった。両村のみで約4万石の酒造米株高を持った。

阿久比地域は両村に舂米（精米）人足を供給する地域となった。酒造業の展開を地域で支える関係が形成されたことを意味し、村を越えた生産体制が成立した。

江戸積み酒の条件は、安定的に供給できることと美酒であることの二つである。前者は後述することとし、知多酒が美酒であったことを明らかにした。その前提として、

18世紀後半の江戸市場を考えると、酒において大量消費時代が到来していたことである。灘などの上方の高価な酒と江戸地廻りの安酒など、江戸は価格に応じて酒が選べることでできた場所であった。江戸地廻りの酒は流通コストがかからなかったため、安酒であっても江戸で十分販売できたが、遠隔地から供給する酒は質の良さが求められた、輸送費を価格に上乘せする必要があり、それに絶えることのできる品質が求められた。

半田や亀崎の酒が江戸で十分通用するようになったのは18世紀後半である。西三河の刈谷城下の「庄屋留帳」には、他の酒に比べ半田や亀崎の酒が高いこと、さらに、美酒であったことが記されている。

明和期を境に、半田・亀崎の酒が刈谷城下からみられなくなり、江戸向けの酒として定着したものと思われる。この時期が村を越えた生産体制が形成された時期と合致する。

江戸積み酒の条件の一つである安定的な供給である。それは江戸行廻船の存在である。西三河には奥立廻船とよばれる樽廻船が存在した。奥立廻船は西三河の酒造家と結びついていたが、半田村・亀崎村の酒も積むようになり、江戸向け酒の安定的な供給が可能であった。

19世紀になると、西三河・知多酒ともに灘との競争力に負け、江戸からの撤退を余儀なくさせた。

西三河と知多酒造家のなかには酒造業を廃業するものおり、新たな醸造業をはじめたものもいた。味醂・酢・味噌・溜などである。これは酒造地帯から醸造地帯への変化であった。

さらに、知多酒は天保期以降、灘に劣らない酒を改良したため、それ以降、幕末にかけて江戸市場での知多酒の地位を回復させた。さらに、半田村では粕酢醸造を展開

させ、早ずしと結びつき、江戸市場での需要が高まっていたため、酒樽・酢樽が江戸に運ばれた。

停滞していた西三河の酒に代わり、半田村・亀崎村の醸造品を主に奥立廻船が運ぶようになり、この廻船の本拠が西三河から亀崎に変わった。ただし、醸造品を運ぶ船は3種類あることが判明した。

醸造品を主に運ぶ船

醸造品を主ではないが恒常的に運ぶ船
必要な際のチャーター船

醸造家の必要に応じ、船を運行することができた。西三河・知多東浦の衣浦湾沿岸地帯は、醸造業のほか木綿業・瓦業などがさかんであり、江戸積みを行っていた。そのため、さまざまな船が存在しており、互いに生産者たちとの関係性を保ちながら、船を運航していた。

最後に、醸造業として発展した幕末期の半田村の経済力について考えてみたい。

従来の研究では、村の経済力の指標は高持ち（土地持ち）の村人の階層構成表であった。しかし、醸造家は必ずしも高持ちとは限らなかった。そこで、村人の村入用の負担割合から、新しい指標に基づく階層構成表を作成した。村政に携わる頭百姓のほとんどが醸造家であることが判明した。醸造業の展開により形成された村であった。

幕末になると村人は土地に縛られるのではなく、さまざまな村の経済力によって計られるべきである。特産品の産業化は特殊なことではなく、全国各地で起こっていることであり、普遍化できるものと考えている。ただし、村の経済力を生み出す力は地域によって異なる。産業のあり方を明らかにすることで、地域の特色を見いだすことができる。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

曲田 浩和「18世紀の尾張国東浦地域の酒造業について」『知多半島の歴史と現在』査読有 18号 2014年 pp.77-89

曲田 浩和「尾張・三河の酒造業と奥立船」『安城市歴史博物館研究紀要』査読有 20号 2014年 pp.1-17

曲田 浩和「18世紀における知多地域の変容と酒造業の展開」『知多半島の歴史と現在』査読有 17号 2013年 pp.111-133

曲田 浩和「尾張国知多郡下半田村にみる村内百姓の経済力と村入用の負担割合」『知多半島の歴史と現在』査読有 16号 2012年 pp.175-189

6．研究組織

(1)研究代表者

曲田 浩和 (MAGARIDA, Hirokazu)

日本福祉大学・経済学部・教授

研究者番号：00329765